

世界ジオパークネットワーク申請候補地域
現地審査報告書

1. 室戸
2. 阿蘇

室戸 現地視察報告書

中田節也・菊地俊夫, 脇田浩二(事務局)

日程：平成 22 年 8 月 17～18 日

主な参加者

尾崎正直(高知県知事)渡辺 巖(海洋コア総合研究センター長)・山口飛鳥(高知コア総合研究センター)吉倉紳一(高知大学副学長)小松幹侍(室戸市長/室戸ジオパーク推進協議会会長)木下恵介(室戸市副市長)荻野義興(室戸市企画財政課長)・谷村幸利(室戸市教育長)島田信雄・柴田伊廣(室戸ジオパーク推進協議会)多田 運(鯨館館長)・久保美紀氏(鯨館ガイド)

見学地点

室戸ジオパークギャラリー(鯨館内)・ジオパークインフォメーションセンター・
行当―黒耳海岸・キッチン海土・室戸スカイライン展望台・室戸岬サイト(御厨人窟→ニュー室戸)・海洋深層水サイト(シレストむろと・ウトコホテル・アクアファーム)・日沖―丸山海岸サイト・とろむサイト・吉良川まちなみサイト・崎山台地サイト

現地審査のまとめ

総評：室戸ジオパークは高知県, 室戸市, 住民, 研究者などが一体となり推進協議会の運営を盛り上げている。付加体形成とその結果として生じた海岸段丘などの地形・地質の多様性は他に類を見ず, 世界に訴えられる十分な価値がある。また, これによって生じた環境, 生物, 文化の多様性は室戸ジオパークのユニークさを象徴している。本ジオパークでは, ジオパーク学の教育やボランティア・ツアー等の整備が行われるなど, 世界ジオパークネットワーク申請のための条件が整いつつある。しかし, 以下に示すように, まだ改善すべき点も見受けられる。

1) ジオサイトと保全

- ・ストーリー:ストーリー性がまだ欠けている。地質だけではなく、ジオに結びつけて生活・文化や生物の多様性を説明するストーリーが欠如している。また、ジオサイト間のつながりがよく見えるようにはなっていない。このジオパークで何を見せたいのかを意識し、サイトを訪れる順番にもストーリー性を持たせることが期待される(例えば、海洋深層水の関連施設間など)。
- ・拠点施設:きちんとした拠点施設がまだ整備されていない。インフォメーションセンターは拠点としてまだ不十分である。また、拠点の一つ考えられる鯨館は、入場料を払ってしかジオパークのコーナーにたどり着けないので、今のままでは拠点とは言いがたい。さらに、ジオに関連した事象をさらに学習したい人を導く施設の整備と誘導が必要である。
- ・説明板:室戸岬サイトには説明板があるが、他のサイトではまだ整備されていない。しかも説明に不適切なものも多く、推進協議会がすべての説明板をチェックして改善する必要がある
- ・ガイド:インフォメーションセンターや鯨館にはガイドが常駐しており、案内(有料)の予約もできるようになっている。また、ボランティアガイドを養成するシステムが整備され多くのガイドがいる。ただし、ガイドがジオの恩恵を十分に理解した上で案内していない。今後、ガイドの品質をいかに保つかを検討する必要がある。例えば、吉良川のまちなみの説明はとても分かりやすく興味深いが、ジオパークのガイドとしてはまだ不十分であった。
- ・その他:南海トラフ斜面・四国全体の中での本ジオパークの位置づけや国定公園との切り分け

を明確にすること、また、ジオ保全のための具体的計画が必要。

2) 教育・研究活動

海洋コア総合研究センター(コアセンター)・高知大学などと連携して、研究教育活動を実施している。コアセンター自身の教育普及活動が、ジオパークの活動と上手く連携しているようにはまだ見えない。コアセンター、高知大学、推進協議会には付加体を研究対象とする若手研究者がいるので、最新の研究の成果がジオパークに順次盛り込まれることが期待される。さらに、高校の授業でジオパーク学の授業が開始されるなど教育への取り組みは高く評価される。

3) 管理組織・運営体制

高知県知事がジオパークを高知県東部の観光の柱であると宣言し、高知県産業振興計画に位置づけられている。ジオパーク推進協議会には、県からも職員が派遣されており、会長の室戸市長を中心に、精力的な運営がなされている。高知県観光振興局や国土交通省四国運輸局も支援している。コアセンターや高知大学、鯨館、国立青少年自然の家との協力関係もある。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

民間のウトコホテルでは、9月からジオツアー付きのお客さんの受け入れを開始するなど、支援は住民レベルまで広がっている。少年自然の家には多くの来訪者があり、ジオと連携したいくつかのツアーが企画されている。付加体ケーキやスーパーバンドなどジオブランドを作り上げる地域の協力がある。

5) 国際対応

インフォメーションセンターには英語が堪能なガイドがいる。室戸三崎サイトの説明板には英語の表記も併記されている。ただし、英語に明らかな間違いもあり、内容も含めて大幅な見直しが必要である。

6) 防災・安全

行当海岸などでは駐車場や遊歩道の設置が具体的に計画されている。枕状溶岩のサイトでは手すりや駐車場などの安全対策も検討されている。まちなみサイトは、地震や台風など自然災害に耐えてきた古い建物が多く、それらのガイドを通じて、防災教育が実施されている。

阿蘇 現地審査報告書

町田 洋・中田節也, 濱崎聡志(事務局)

期間：平成 22 年 8 月 10～11 日

主な参加者（敬称略）

坂元英俊・石松昭信・鈴木陽子(阿蘇地域振興デザインセンター), 池辺伸一郎(阿蘇火山博物館), 渡辺一徳・横山勝三(熊本大学名誉教授), 須藤靖明(元京大火山研究センター), 佐藤義興(阿蘇ジオパーク推進協議会会長, 阿蘇市長), 緒方 徹(阿蘇世界文化遺産推進室), 高村貴生(阿蘇自然案内人協会), 蔵本厚一(日本リモナイト), 小嶋龍也(ASO 田園空間博物館), 石崎義彌(一の宮町観光ボランティアガイド会), 村田隆一(阿蘇インタープリターズ), 阿部節生(阿蘇山上事務所), 山村唯夫(山村酒造), 国村真希(南阿蘇ビジターセンター)

見学地点

二重峠, 阿蘇地域振興デザインセンター, 大観峰, 日本リモナイト, 道の駅阿蘇 (ASO 田園空間博物館), 阿蘇神社、水基巡りの道, 阿蘇火山博物館, 阿蘇中央火口丘, 阿蘇山上事務所, 南阿蘇鉄道トロッコ列車, 山村酒造, 南阿蘇ビジターセンター, 高遊原溶岩台地

現地審査のまとめ

総評：ジオの要素は多数ある。一方、従来様々な観光客誘致の方策をおこなってきているため、相対的にジオの存在感が希薄である。もっとジオをベースにする必要がある。世界ジオパークへ向けては、世界有数規模のカルデラやその底での文化に加え、特徴的な地形とその年代論を含めた生い立ちなどの説明が重要であり、誰にもわかるジオストーリーが必要である。さらに、世界ジオパークをめざす上で、ジオツーリズムをどう組み立てていくか。従来の各種ツーリズムをジオツーリズムと捉えているように見受けられる。ジオツーリズム案内の品質保証とそのための仕組みを整備する必要がある。ジオパークの解説板やHPがまだ計画段階であり、早急に整備が必要である。

1) ジオサイトと保全

- ・ストーリー：巨大カルデラの特徴的な地形とその年代論を含めた生い立ちなど、カルデラ形成の火砕流堆積物の説明が重要であり、誰にもわかるストーリーが必要である。中央火口丘の地形と地質についての説明も重要。また阿蘇の訪問者にとっては草原景観が印象的であり、その由来について、人為的か自然的か、土壌学を含めた科学的な認識を示してほしい。カルデラ底での土地利用と文化はアピールできる。阿蘇には火山だけでなく人の歴史がある。遺跡も発見されており、阿蘇神社や戦国時代の歴史も含め、カルデラ底に人が住み始めた2500年前(弥生時代)以降の変遷の説明がほしい。また、カルデラ底での水質と地質は関係が深い。各地で水の硬度について調査を行い、その分布図があると、酒造など現在の水利用を考えさせる材料となる。阿蘇黄土(リモナイト)は、阿蘇火山の恵みを考えさせるジオサイトとしてアピールできる。湖成層の形成・離水と関連づけた研究を実施し、地質学的に説明できるとさらに良くなる。
- ・看板：日本ジオパークとしての解説板がまだ計画段階であり、早急に整備が必要である。特に、カルデラ縁の二重峠と大観峰などは阿蘇カルデラの入り口のサイトとして機能を果たす必要がある。地形が見通せる場所に解説板を設置し、一般人に対しては、カルデラ地形の立体模型を

置くなどの工夫も必要である。

- ・ 拠点施設: 山上の草千里に阿蘇火山博物館があり、学芸員3名のほか、学術顧問3名が在籍し支援している。ジオパークの入口拠点としては地理的に難点がある。一方、阿蘇の入り口であるJR 駅前や内牧温泉には観光案内所や阿蘇デザインセンター(以下、阿蘇 DC)があるが、ここではジオパークへの誘導・案内が十分とはいえず、拠点間の綿密な連携が必要である。また、南阿蘇ビジターセンターは阿蘇の植物の重要拠点であるが、アクセスに問題があるので宣伝を含めた訪問客の誘導法が大事である。
- ・ ガイド: 火山博物館内にあるNPO法人阿蘇ミュージアムが、インタープリター養成講座を主催し、これまで80人を認定。このうち、20人が同博物館で有料のジオツアーを実施している。一方、2009年に、阿蘇各地のツーリズムの活動団体を一元化するため、阿蘇エコツーリズム協会が設立された。案内人は多いが、主要団体である自然案内人協会とインタープリターズとが独立しており、ジオのガイドの品質を保証し向上させるための仕組みを整備する必要がある。
- ・ その他: 観光客誘致のためのパンフレットは多いが、ジオ中心のガイドブックは不十分である。

2) 教育・研究活動

火山博物館の学芸員が、学校からの見学や火山体験プログラムで年間7000人前後に案内、説明をおこなっている。館内を一昨年改装し、レクチャーや実験ができるようにした。また、2006年から地元小学校にでかけ、「目指せ一流！我ら阿蘇の研究者」事業等も行っている。このほか、NPO法人阿蘇火山ミュージアムでは、小学校高学年から中学生向けの阿蘇のガイドブックを出版している。

3) 管理組織・運営体制

2009年4月に阿蘇8市町村を中心とする阿蘇ジオパーク推進協議会が発足し、阿蘇 DC が事務局となっている。1990年設立の阿蘇 DC は、阿蘇地域市町村と熊本県が出資した基金をもとに、その運用益で事業を推進する公益財団法人である。2010年7月に、同協議会事務局内に阿蘇ジオパーク推進室が設置され、英語対応職員を1名採用し、常勤7名体制となった。世界ジオパークに向けた振興計画は、2010年9月末に完成予定である。公式HPを10月1日に開設予定で、今年は日本語、来年は多言語化や動画作成を計画中である。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

従来のエコツーリズム等をジオツーリズムと捉えている。世界ジオパークをめざす上で、ジオツーリズムをどう組み立てていくのか。ジオサイトの保全と教育、ツアーというステップを踏んだ見せ方が必要である。阿蘇黄土(リモナイト)を使った関連商品を多く出し、ジオブランドとして価値が高い。リサイクル商品でもある。また、トロッコ列車は、ジオ鉄として非常に楽しめるサイトである。ジオの説明をもっと入れるとよい。

5) 国際対応

ジオパークとしてのパンフレットは、日、英語版があるが、海外観光客向けに、中、韓国語などの他言語化も必要である。解説板は日、英を計画中。今後の課題である。

6) 防災・安全

阿蘇市長を会長とする阿蘇火山防災会議協議会が組織され、気象庁阿蘇山測候所とも連携して火口の監視体制が整備されている。火山ガス観測システムがあり、危険度に応じた規制区域と避難基準を設けている。さらに警報システムや火山ガス警告のパンフレットが4カ国語で作成され、外国人観光客への安全対策も適切に行われている。